

第四章 駿河・東海地方の塔

第 23 番 多宝富士大日蓮華山大石寺五重塔—日蓮正宗—

静岡県富士宮市

大石寺は、日蓮の高弟日興が、波木井実長らと不和になり身延を去って、この地で南条氏の力を借りて、正応三年に創設したものと伝えられています。この場所は、南条氏の居館の鬼門の位置に当たるもので、この地区を開発しようとしていた南条氏が、鎮守寺として創設に協力したものであると思われる。三門は、正面約 22m・横幅約 10m・高さ約 23m もある我国有数の規模を誇り、徳川六代将軍家宣の寄進等により、享保二年に完成したものである。三門をくぐり、左右を塔頭に囲まれた石畳の参道を進むと、御影堂があります。その先を右横に曲がり川を渡った先の杉林の中に、朱に塗られた五重塔が見えてまいります。

五重塔は、亀山藩主板倉勝澄をはじめ壇信徒たちの浄財と徳川家宣夫人天英院の援助で、寛延二年（1749）に建立されました。中央間の墓股の内部に三つ葉葵が入り、軒隅下には邪鬼彫刻が軒を支えております。軒は初層から四層まで二軒繁垂木の平行垂木で、五層の軒のみ扇垂木を用いています。

一辺 6.36m・総高さ 34.3m でおおむね和様のしっかりとした塔です。心柱は、礎石からたっており、江戸時代の建物としては珍しい存在であります。



第 24 番 医王山油山寺三重塔—真言宗智山派—

静岡県袋井市村松

油山寺は、約 1300 年前行基により開山され、昔この山から油が出ていましたので通称「あぶらやま」と呼ばれています。袋井駅から車で 10 分山手に行くと山門につきます。この山門は、万治二年井伊直好公が建立した掛川城の大手門を移築したものです。この寺が栄えた縁起は、孝謙天皇が御眼病のみぎり、本尊薬師如来に祈願し、「るり」の滝水で御眼を洗淨されますと全快なされ、この寺を勅願寺にされたことによります。三重塔は、建久二年源頼朝が眼病平癒で寄進し、遠江国守護職工藤祐経が普請した由緒深い塔ですが、今川の戦乱で焼失し、慶長十六年（1611）に再建されました。亀腹基壇の上に勾欄のない縁をめぐらし、組物は三手先で、軒は初・二層を二軒繁垂木の平行垂木とし、三層のみ扇垂木を用いています。上層は唐様と天竺様をミックスさせた折衷で、中下層は和様の一辺 3.62m・総高さ 23.88m です。木割り豪壮にして、相輪は強大、屋根の反り・枅組は美しく、滋賀の長命寺・京都の宝積寺と共に桃山時代の三名塔といわれています。



第 25 番 小松原山東観音寺多宝塔—臨済宗妙心寺派—

愛知県豊橋市小松町坪尻

東観音寺は、渥美半島の南側を走る国道 42 号線から、少し入り込んだところにあります。山門をくぐり、右手に進むと、参道の右に多宝塔があり、正面に本堂があります。

天平五年（733）行基が馬頭観音を刻み本尊とし、創建したと伝えられる東観音寺は、昔はもっと海よりにあり漁民の平安を祈る寺として栄えました。宝永四年（1707）の津波で伽藍は、全壊し今の場所へ移りました。

多宝塔は、戸田家の重臣であった藤田左京亮が寄進し大永八年（1528）に建立され、正徳六年（1716）に今の場所に移設されました。屋根は柿葺きで、一層と二層の緩やかな反りが、ほどよく調和して、安定感のある塔になっています。和様と唐様の折衷様式で、初層の須弥壇には多宝如来が安置されています。軒を上・下重とも扇垂木とした唯一の例で、逆蓮頭勾欄付き縁をめぐらし、中央間棧唐戸、脇間彫刻付板張り、組物は下重が出組、上重が四手先です。一辺 3.33m・総高さ 12.15m の多宝塔で、珍しく亀腹は、板張りです。亀腹の方式は、この地区に多く見られる独特のものようです。



宮大工のざれごと—④ほぞを付ける

二つの部材を接合するとき、一方の材端につくる突起、他方の材に、この突起を差し込むほぞ穴をうがって、両者を合わせる。突起を受け入れる側の穴をほぞといいます。“ほぞを付ける”という大工の隠語で、“食事をする・飯を食う”ことをいいます。

第 26 番 龍雲山三明寺三重塔—曹洞宗—

愛知県豊川市豊川町波通

豊川弁財天で親しまれ、弁財天は「等身大の裸像」で十二単の衣裳を召されており、12 年毎に（巳年）御衣裳替えを行い、その際御開帳される慣わしで有名な三明寺に、見事なまでの著しい反りのある軒を持つ三重塔があると知り、心を躍らせて、巡礼しました。寺は、豊川駅から歩いて 5 分のすぐ裏手の木立に囲まれた森の中にあります。

文武天皇の命により、大和国僧覚渚阿闍梨が堂宇を建立し、呉国の僧知蔵法師が教・律・論の三部経文を納められたことから三明寺と寺号にしたと伝えられています。平安時代になると、三河国司・大江定基は、愛人の力寿姫の死を悲しみ、剃髪して姫の面影を弁財天に刻み安置したと「今昔物語」に語り伝えられています。その霊像を祀り今日に至っているが、伽藍は鎌倉時代に兵火で焼失し、無文元選禅師が復興し、千手観音菩薩を本尊とされました。

三重塔の建立年代は、室町末期の享禄四年（1531）と確認されています。塔は総高さ 14.5m で、基壇の上に勾欄のない縁をめぐらし立っており、初層・二層はおおむね和様で、軒は二軒繁垂木の平行垂木を用いています。三層は純禅宗様で、軒は扇垂木、勾欄も逆蓮頭と、和様と禅宗様がみごとに折衷されています。軒の出は深く、三層の軒先の著しい反りで塔全体に軽やかな感じをかもしています。



第 27 番 成道山大樹寺多宝塔—浄土宗—

愛知県岡崎市鴨田町

歴代徳川将軍家の位牌所とされ、14代までの将軍の位牌が納められている浄土宗の大樹寺に、多宝塔があると聞き、早速出かけてみました。大樹寺は、名鉄岡崎駅から大樹寺行きバスで終点下車、徒歩7分で山門につきます。

この寺は、安城松平家の祖となった松平親忠が浄土宗鎮西派の名僧勢誉愚底に帰依し、文明七年に開創しました。のちに、安城松平家は惣領家となり、この寺は他の一族や家臣からも寄進を受けるようになり、以後、松平家の菩提寺として手厚い庇護を受けてきました。永禄三年桶狭間合戦で、松平元康（のちの家康）が当寺に避難した折り、祖洞和尚が総門の貫木を振り回し敵勢を撃退した話は有名です。家康の死後、位牌が自身の遺言によって当寺にまつられています。

多宝塔は、松平第七代清康が大檀那となり、天文四年・1535年に大工棟梁・藤原長康与三郎により建立されました。一辺4.35m・総高さ約13mのよく調和の取れた美しい塔であります。浄土宗で塔をもつ例は少なく、中でも中世の塔を残しているのは、当寺と斑鳩の吉田寺のみであります。



第 28 番 八事山興正寺五重塔—高野山真言宗—

愛知県名古屋市昭和区八事本町

開基を鎌倉時代の興正菩薩とする興正寺に、江戸時代以前に作られた東海地区唯一の五重塔があると聞き、早速巡礼しました。地下鉄鶴舞線八事駅を出て西の方へ坂を3分ほど下ると、右側に興正寺（こうしょうじ）があります。大通りから総門をくぐって境内に入れば、大都市名古屋の市街地とは思えない静寂の中、緑濃い木々に覆われて、女人門があります。その先五重塔、本堂と一直線に並んで建っています。

この寺は、天瑞円照和尚が、高野山から下りこの地に草庵を結び、尾張二代藩主徳川光友により建立が許可されて、徳川家の祈願所となり、また真言密教の修行道場となりました。

多分、この地は名古屋の東からの入り口であり、砦としての軍事的性格も兼ねていたのでしょう。高野山に模してつくられているので、尾張高野とも呼ばれ、寺を二つに分けて東山を遍照院、西山を普門院といいます。東山が先に開かれ、最初は殺生禁断の地、女人禁制でした。西山には、本尊阿弥陀如来の他、大随求明王が安置されており、苦しまないで成仏できる「ぽっくり寺」として多くの老人の参拝者を集めている。

五重塔は、文化五年（1808）に建立された一辺 4.0m・総高さ 30.0m のおおむね和様の塔で、塔身が細長く相輪も短くいささか安定性に欠けるが、妙にバランスして建っている。基壇上に立ち、初層中央間の棧唐戸には尾張公の紋所を彫刻し、組物は三手先を用い、軒は全層とも二軒繁垂木の平行垂木としています。勾欄は、二層と四層が組勾欄、三層と五層が擬宝珠勾欄の縁をめぐるせています。江戸時代の塔としては、彫刻も少なくすっきりとして、流れるような線の美しさを持っている。



第 29 番 医王山密蔵院多宝塔—天台宗—

愛知県春日井市熊野町

禅宗様式の入った多宝塔が密蔵院にあると知り、早速訪れてみました。春日井駅からバスで熊野停留所下車、徒歩 10 分弱で門前に着きます。

天台宗の復興の命を受けて、嘉暦三年（1328）に御嵩の願興寺からやってきた慈妙上人によって創建されたもので、上人は栄西の始めた葉上流の伝法灌頂を伝え、室町時代中期には尾張天台宗の本山にまでなり、盛時には末寺 700 以上、修行僧が 3000 人を越えたと伝えられています。しかし、応仁の乱から戦国時代にかけて衰微し、織田信長の比叡山焼き討ちで大きな打撃を受けました。

多宝塔は、室町時代の初期に建てられたと推定されている。全般的には禅宗様式であるが、垂木は上下層共二軒平行垂木を用いている。正面の扉は、唐棧戸とよばれる縦横に棧の入った戸であり、屋根の軒反りや勾配はやや急で、近江の石山寺のものによく似ています。塔全体の比例が寸法的に整理されている点に特徴があります。即ち、総高さの半分を上重の軒高さとし、そのまた半分を下重軒高さにしています。塔の総高さは 16.5m です。



第 30 番 鳳凰山甚目寺三重塔—真言宗智山派—

愛知県海部郡甚目寺町甚目寺

尾張四観音の筆頭に指定されている甚目寺に、全国でも有数の高さを誇る三重塔があると知り、巡礼に訪れました。名鉄甚目寺駅前を左にいくと、門前商店街通りに突き当たり、更に右へ行きますと、すぐに門前に着きます。

「甚目寺縁起」によれば、甚目連竜麻呂（はだめのむらじつつまろ）の網に拾い上げられた紫金の聖観音像を安置したことに始まると伝えられています。明治に近くから出土した瓦やら、更に平成二年にも軒丸瓦が見つかったことにより、奈良時代以前に伽藍があったことが、確認されました。

豊臣秀吉・徳川義直等の権力者の厚い保護と崇敬を受けて隆盛したようです。南大門は、寺伝によると源頼朝の命を受けて、梶原景時が奉行となり、建仁元年（1201）に落成しています。

三重塔は、名古屋の両替商・吉田半十郎政次の寄進で、寛永四年（1627）に建立された堂々とした塔であります。擬宝珠勾欄付縁をめぐらして立ち、初層中央柱間は板唐戸、脇間は連子窓とし、組物は三手先で、軒は全層二軒繁垂木の平行垂木を用いています。純和様で、一辺 2.73m・総高さ 24.7m の三重塔としては規模が大きい方の部類に入っています。初層内部には、愛染明王坐像が安置されています。



第 31 番 大塚山性海寺多宝塔—真言宗智山派—

愛知県稲沢市大塚町

律令時代に国府であった稲沢市に二つの重要文化財の多宝塔があると知り、勇んで巡礼に出かけました。その一つの性海寺へは、名鉄国府宮駅からバスに乗り、せんき薬師下車、南西方面へ徒歩 5 分で、門前に着きます。性海寺は、弘法大師が熱田神宮参詣の際に、大きな塚を造り金銅の歓喜天を埋め、国家安泰と民の豊樂を祈ったのが始まりとされています。しかし、もっと後に尾張の豪族長谷部氏を後援者として開創されたのが、本当であろう。承久三年、浄蓮源延上人が善光寺本尊を模写し、阿弥陀如来一光三尊を本尊としました。さらに、建長五年良敏上人が、本堂、護摩堂、多宝塔、宝塔等を造営し、七堂伽藍が整ったようです。



山門をくぐり抜けると、真っ先に朱と緑のコントラストが美しい多宝塔が眼に入ってきます。この多宝塔は、建長五年の建立と伝えられていますが、様式から室町時代中期の再建でありましょう。一辺 3.64m・総高さ約 13m、柿葺きで、上重の軸部直径が下重柱間の四割五分と細く、締まって見え、プロポーションの良い塔です。塔の前には、愛染明王を拝む拝殿が設けられています。

宮大工の知識—Ⅳ多宝塔の各部名称

